ファイターズのOB紹介

社会で輝く青き星 7

「関学の精神」 名村 隆行

［国際航業株式会社］

関西学院高等部よりFIGHTERSに所属。高校時代はオフェンスガード、大学では中学部タッチフットボール部・ディフェンスコーチとして4年間を過ごす。1994年3月関西学院大学法学部卒業。卒業後、千葉県にて農業技術を2年間学んだ後、東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻で東南アジアの森林管理について学び、修士号を取得。同大学の博士課程の単位取得後、（特活）日本国際ボランティアセンターのラオス森林管理・村落開発プロジェクトの現地代表としてラオスに駐在。その後、国際協力機構（JICA）のラオス森林管理プロジェクトに従事し、森林管理や生計向上活動を支援している。現在は国際航業（株）の海外事業コンサルタントとして、引き続き、ラオスやベトナムにおいて、森林管理や農業の指導を行っている。

私は現在、国際協力分野のコンサルタントとして、主に東南アジアの国、特にラオスやベトナムを中心に、森林保全活動や村落開発活動の支援をしています。大学時代の4年間は中学部コーチとして過ごしましたが、学生の当時は、自分がこの歳まで途上国支援に長く関わるようになることは想像していませんでした。ただ、ここに至る道を思い起こしてみれば、あの4年間の中学部コーチで培った経験が、今の自分に大きな影響を与えていることに気づかされます。

FIGHTERSの4年間でのエピソード（考えていた事や学んだ事など）

当時の中学部タッチフットボールは、甲子園ボウルへの出場と中学日本一を目指して、練習に励んでいました。また、中学3年間だけで完結するのではなく、中高大一貫10年間をフットボール選手育成の期間と位置づけ、中学3年間は、基礎体力と総合的な運動能力の向上、そして基礎的なフットボール理論と技術を習得するための指導プログラムや練習日程を作っていました。ただ、中学生と日々を過ごすにつれ、中学部コーチの役割は、技術指導という枠をはるかに超えたエキサイティングなものであることが徐々にわかってきました。

中学部は、個性的な先生方の指導のもと、青島キャンプ、千刈キャンプなどでの学校行事などを通じたユニークな教育プログラムを持っており、中学部コーチは、これらの学校行事のお手伝いをしていました。中でも青島キャンプは、無人島でのサバイバルキャンプであり、過酷なキャンプ生活を通じて、子供たちが思いがけない一面を発揮する場面に遭遇します。そんな様子を見ていると、この世代の子供たちは、のびのびとした環境を与えて周囲がちょっとした前向きなサポートをすれば、小さな成功と挫折を積み重ねながら自分の立ち位置を見つけて逞しく生きていく術を身につけていけるのではないかと。中学部タッチフットボール部とは、フットボールを通じて、不定形なものに形を与えていく、まさに人格形成の場であるべきだと考えるようになりました。そして中学部コーチとして彼らと関わり、彼らと成長を共にする機会が与えられた幸運と喜びを感じながら、日々過ごすことになりました。

実際に中学部コーチができることは、フットボール環境の提供と側面支援ぐらいなのですが、タッチフットボール部の生徒たちは、3年間で身体的にも精神的にも驚くほどのスピードで成長していきました。入部当初から上背はあるが身体の線が細くてバランスが悪く、精神的にもひ弱で、ハードコンタクトが嫌いだったA君。彼はその後、高校・大学とアメリカンでディフェンスラインのスタメンとして活躍しました。身体が小さく、正直、選手として伸びるのは難しいのではないかと思っていたB君。持ち前の努力を重ねて、パートリーダーとして成長、高等部の全国大会決勝のクリスマスボウルで大活躍していました。

もちろん、サクセスストーリーばかりではありません。身体能力が抜群で、今後の活躍が期待されていたのに、フットボールに魅力を感じられず去ってしまったC君。フットボールは楽しんでいたが、帰国子女で、日本の生活環境や人間関係になじめずに、結局、退部して転校してしまったD君。練習のきつさに耐えられなくなってやめてしまった多くの生徒たち。相談事があると言われ、日が暮れてゆくグランドで、長い時間、苦しい心の内を語り合ったあの時間は、23年経った今でも鮮明な記憶として残っています。

コーチとして、その子たちの成長に寄り添うことのできることの喜びと挫折を経験した4年間こそが、現在の職業の出発点になっています。

現在の仕事について

現在は、森林管理のコンサルタントとして、森林減少が進みつつある発展途上国で、村人の生計向上を図りつつ、森林の保全や増大させる業務に取り組んでいます。実際の私の業務は多岐にわたるのですが、現地のパートナーと協力しながら、ラオスやベトナムの山奥の村を廻って、地図を広げながら、村人と一緒に、森をどのように保全して、どのように植林するかを取りまとめ、森林管理計画を作るのがメインの業務です。

基本的によそ者に対して寛容な社会ではあるのですが、やはりどこの馬の骨かもわからない外国人に対して、最初から心を開いてくれることはありません。村で寝泊まりして飲食を共にし、一緒に畑や森の様子を見に行ったりする中で、徐々に仕事の話ができるようになってきます。また地図も読めない村人を相手にするので、とにかく村人と山を歩きながら、「ここは傾斜地だから植林が必要だよね」「いやここは農地にとっておきたいから駄目だ」などと言いながら、地図や衛星画像に情報を書き込んでいくという、地道な作業を繰り返すことになります。

こういう取り組みを繰り返していくと、徐々にですが、村人の言動や行動に変化がみられるようになり、「最近、ここの小川が干上がってしまうので、小川の周辺を森林保護区としたい」とか、「村の生活を支えている森を、子供たちのためにも残すべき」などの積極的な提案が出てくるようになります。対話を繰り返すことで、ようやく村の森林管理計画が徐々に形になっていくわけです。

現在の業務と中学部コーチとは、もちろん異なる点は多々あります。しかし、機会と自らの技術を提供し、生活に寄り添いながら行動変容を促し、ともに成長していくという意味では、大きく共通するものがあります。中学部コーチが今の自分のスタートとなっていることを思うと、あの時、中学部コーチとしての機会を与えて頂き、支えてくれた関学フットボールファミリーの友人や、先輩、後輩、中学部の先生方、そしてなによりも、誰にとっても一度しかない中学時代を共に過ごしてくれた生徒たちに、心から感謝しています。

現役生へ

「私たちは努力して専門知識の修得と人間形成に努めなければならないが、それは単に自己の利益のためではなく、隣人への奉仕を目的としたものである」という関西学院の建学の精神「Mastery for service」は、まさに中学部コーチの精神でもあり、また現在の業務に向かうときの精神でもあります。自分と自分以外の人のために、目標に向かって自己の研鑽に励めば、おのずと道は開けると信じて、お互い頑張りましょう！